

障害者スポーツ界において指導者として活躍をしている天理出身者は数多くいる。例えば橋本和典氏（日本身体障害者アーチェリー連盟副理事長、アトランタ・シドニーパラリンピック日本選手団アーチェリーコーチ）、中森邦男氏（日本パラリンピック委員会事務局長、バンクーバーパラリンピック日本選手団団長）、増田和茂氏（兵庫県立障害者スポーツ交流館館長、日本障害者スポーツ協会技術委員）、工藤孝富氏（大阪市立長居障害者スポーツセンター職員、北京パラリンピック日本選手団陸上競技コーチ）など、日本の障害者スポーツを牽引している方が数々いるのである。今回は北京パラリンピック日本選手団水泳コーチ、障害者水泳世界選手権大会日本選手団コーチ等で活躍をされている寺田雅裕氏（神戸市立工業高等専門学校教授）から障害者スポーツを指導されている立場から現場の様子を紹介いただいた。

寺田氏は中学校の教員から高専に転職。いずれも水泳指導者として好成績を上げていたことがきっかけで、シドニーパラリンピック前に日本選手の指導を依頼された。最初は一つのクラブチームのコーチであったが、次第にそれと平行して「障害者のレース分析」を行う日本チームの科学スタッフとして活動するようになった。アテネパラリンピック前は、レース分析や講義をするなど科学スタッフとしての役割が大きかったが、アテネ後は日本チームのコーチとしても活動。現在では国際大会でも選手団のコーチとして活躍をしている。

私が2008年の北京パラリンピック水泳競技を観戦した時、寺田氏は視覚障害選手のレースを担当していた。視覚障害の選手はターンやゴールのタッチをする時、コーチがタッピング棒という棒で選手の身体をタップすることでターン等のタイミングを知る。このタップのタイミングはコーチが選手と息を合わせて行わなければタイムに大きな影響を与える。幾度も練習を積み重ねて来たのであろう、本レースでは見事なタイミングでタップ、選手は好成績を残した。こういった活動は目に見えてわかるが、見ただけでは分からない障害者スポーツの現状を以下、寺田氏に語っていただいた。

* * *

障害者水泳の現状

最初は、健常者も障害者も水泳は水泳だと、同じような思いで指導を始めた。もっと言えば、健常者の技術をそのまま障害者に当てはめようとしていたが、現実とは全く逆であった。四肢障害や視覚障害、下半身不随者などのバランス感覚の優れていることや空間認知力などは、健常者の練習にドンドンと取り入れることとなった。障害者スイマーと一緒に泳ぎを探ることは、ひいては健常者スイマーの欠点や不足を発見する大きな手掛かりとなり、障害者スイマーと工夫を凝らせば凝らすほど、健常者スイマーの記録の更新に寄与する結果となっている。

しかし、残念ながら、日ごろの環境は健常者と障害者は完全に分けられている。営利目的のプールでは、障害者は扱ってくれない。公共のプールでは、なかなか障害者が泳げる環境がなく、福祉センターなど限られた場所に行く必要がある。試合に関しても、障害ゆえ同じルールを適用することができず、お互いに

見る機会もないのが現状である。そこで私は神戸市水泳協会に、健常者と障害者が同じ土俵で試合をすることを提案し、実現した。現在も行われてはいるが、未だこれ以上の広がりはない。また、神戸高専のチームが例年、障害者との交流大会を企画し、障害者の泳ぎや介助法を学び、参加金を寄付するなどの活動をしているが、これも大きな広がりはないのが現状である。

行政においても、国立オリンピックセンターを利用することは管轄外ということで利用ができず、資金面でもオリンピック選手のようにスポンサーがつくわけもなく、日本代表選手として海外に行く際にも多くの選手が自己負担を強いられる。

コーチの指導以外の役割

まずは、大会に参加するための移動が大変である。特に飛行機内は、コーチは寝る時間はない。車いすの選手などは、コーチが数人で抱え上げトイレに運ぶ。視覚障害者を抱え上げることはないが、慣れない機内は帯同する。食事の際は、どこに何が入っているかは時計の文字盤のように「2時の場所にご飯」などの説明が不可欠である。両腕のない選手は、テーブルとの十分な空間がないと足を使って食べることができない。これらは、現地に入っても同じである。特にバイキングは、視覚障害者への説明は難しく、海外に出ると食欲をなくす選手がいる。また、四肢障害者には必ずコーチが取り分けないといけない。車いすなら届かない場所にあることもあり、片腕の選手はお盆は持っても取ることができない。これは、日常的な買い物やお土産を買うときでも同じである。

試合における役割も大きい。コーチングはもとより、入水、退水の介助やターン、タッチのタッピング。最近では、体を締め付ける水着が主流になり、障害者が1人で着ることができず、それを着せるのに大人が2人で30分ほど格闘する。そして試合では、タイムや映像を取り、場合によっては障害の違いによるクラス分け検査やドーピング検査に帯同する。

教えてもらって初めてわかる世界である。



写真上：
視覚障害者のターンやタッチの
合図を送るタッピング棒

写真右：
プールサイドに置かれた義足。
水泳競技では義手や義足は外し
て泳ぐので、よくあるシーン

いずれも2008年北京パラリン
ピック水泳会場にて
(2008年9月)

